



増田 昇氏
(大阪府立大学大学院教授)

略歴

1952年大阪府生まれ。1974年大阪府立大学農学部卒業、1977年同大学院農学研究科修士課程修了。株式会社市浦都市開発建築コンサルタンツ、大阪府立大学農学部助教授などを経て、1997年より現職。専門は緑地やオープンスペースを対象とするランドスケープ・アーキテクチャ。

近代化の中での大阪平野の水・緑が喪失

- 明治末期から大正の大阪は、近世江戸期の大阪三郷の市街地形態が分かる状態であり、内部には全て水路網が残っている。
- 現状ではほとんどが連担してしまい、三郷内部のまとまった緑は大阪城、上町台地、靱公園くらいしか見られない。また「口の字」の水路は残っているが、他の水路網はなくなっている。



大阪平野は自然的、社会的条件に支配され緑が少ない

- 大阪の地形的特性を見ると、干潟を埋め立ててでき上がった市街地である。原風景は大半がヨシ原で、クワイや蓮がある風景である。樹木景観は、千里山丘陵の麓、生駒山の扇状地までいかなければ見られない。関東ローム層と違い、樹木が豊かに育ちにくい自然環境に支配されている。
- 大阪は、古くから市街地が形成され、大規模な土地利用がなかったため、市街地内部にまとまった緑を取れなかった。
- 気候帯は照葉樹林帯であるが、土壌条件

が悪いために緑が育ちにくい。地形的にも上町台地という1本の洪積台地しかないため、目に映る立体的な緑は非常に少ない。

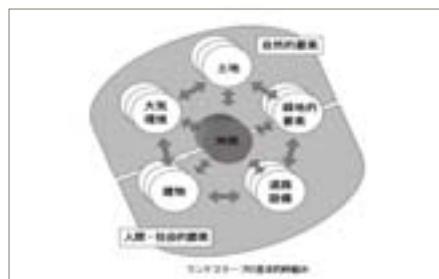
- 景観の認識の仕方には、植生、気候、植物層、水系、地形などがあり、それが時間的に蓄積されて今の風景となっている。



出典: Isaak S. Zonneveld, 1995. Landscape Ecology. SPB Academic Publishing

緑地的要素は人間・社会的要素と自然的要素のインターフェイス

- 緑地的要素(オープンスペース)は、人間・社会的要素としても、自然的要素としても見られる。これがあるインターフェイスとなって1つの景観を形成している。



市街地の中で認識される自然の拠り所

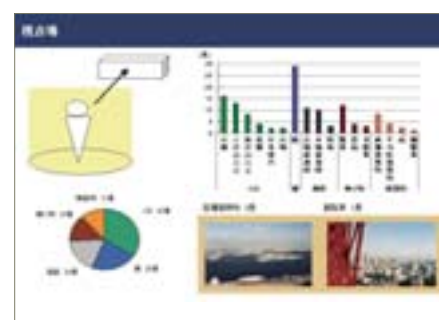
- 大阪の景観は、地形的あるいは歴史的な拠り所が少なくなり、見えなくなってきている。
- 大阪市のアンケート調査(平成14年度)によると、市民に好まれている自然的な風景の視点場は、海沿いや川沿いに多く、また上町台地などの地形の変曲点にも存在している。
- 今も、市街地の中で地形の拠り所や自然の

拠り所が多く捉えられている。



風景を捉えられる引き空間や新しい視点場が大切

- 風景を捉える位置も非常に大事であり、橋梁や広幅員道路といった引き空間が担保されて初めて景観を捉えられる。
- 引き空間や全体風景を捉える場が少なくなっているため、川辺などのオープンスペースから景観を捉える割合が高くなっている。
- 新しい視点場として観覧車や高層建築物、電車や客船などもある。特に環状線から捉える風景は大阪にとって大きな意味を持っている。



時間による変化が大きな意味を持つ

- 風景にとって、日変化、季節変化による移ろい性、変化性が大きな意味を持つ。
- 大都市大阪と言えど、その中に多くの自然要素を持ち、それが有効な視点場を形成し、その季節変化や日変化が美しい景観として捉えられている。



河川を軸として関西の景観構造を捉え直すべき

- 「近畿地方水土ランドデザインとギャラクシープラン」(H8年)では、地形は都市を差別化するのに対し、河川は都市を貫いていて文化軸を形成していると提案している。
- 従来の近畿の都市構造は、均一な土地利用、同一な機能をつなげることにより、効率性を高めようという形で作られてきた。
- それに対して川は市街地部、手前の農村地域、周辺の山系、盆地、その後ろの大山脈を貫いており、流域という単位で見ると、1つの文化圏として捉えられる。
- 各々今まで卓越していなかった都市構造の中に川という構造を入れて捉えることで、それに対応した何らかの景観構造のあり方が考えられるのではないか。

